
雨男

テラタスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨男

【Nコード】

N9258D

【作者名】

テラタスケ

【あらすじ】

幼い頃に聞いた都市伝説とその後体験した奇妙な出来事。両者の符号の一致が意味する物は何なのか？

「雨男が出たんだって！」

私が小学生の時なので今から20年程前の話になる。

当時、私が通っていた学校で流行った怪談的な噂、今でいうところの“都市伝説”に【雨男】という話があった。

【雨男】といっても、運動会や遠足に雨を降らせる迷惑な存在の事ではない。

大まかな話はこうだ。

- ・三日間雨が続き、南條池（私が通う小学校の近くにあった溜め池）から雨男が現れる。
- ・雨男は子供にしか見る事が出来ない。
- ・雨男は雨が降り続く間、子供を探し続ける。
- ・雨男に見た子供は南條池に引き摺り込まれて死んでしまう。
- ・雨男が通った跡には紫色の糸が落ちている。

そもそも雨男を見た子供は殺されてしまうのだから、雨男を見た者等いる訳ないのだがそういった矛盾がある所がいかにも“都市伝説”らしいとも言える。

誰が最初にこの噂話を言い始めたのかは分からない。他愛の無い冗談だったのかもしれない。

ただ、この噂が爆発的に広まったのには訳があった。

佐藤優香ちゃんは私と同じ学校に通う4年生の女の子だった。

私が通っていた学校は所謂マンモス校で1学年に400人近い生徒がおり、クラスの違う優香ちゃんがどんな子だったのか私は知らなかった。

そしてその後も知る事は無かった。

いや、正確には

「知る事が出来なくなった。」

三日前から行方不明になっていた優香ちゃんの遺体が南條池で発見されたのは、シトシトと雨が降り続く6月の中頃だった。

現場の状況から警察は他殺と断定した。

「雨男が優香ちゃんを殺したんだ！」

この噂は瞬く間に学校中を駆け巡った。

休み時間の間はほぼ全校中の生徒がこの事を話題にし、気の弱い生徒の中には雨がぱらついただけで泣き出したりする者も出た。

流石に学校側もマズイと思ったのか、生徒同士でこの噂話をする事を禁止するよう通達をしたのだが、一向に収まる気配は無かった。

それどころか、

「通学路に紫色の糸が落ちていた。」

「雨男は次の獲物を狙っているらしい。」

果ては

「優香ちゃんを引き摺っている雨男の後ろ姿を見た。」

という、遺族からすれば嘔飯物の噂まで飛び出す始末だった。

子供達の安全の為、教師や保護者が先導しての集団登下校も行われていたが、それでも雨が降ると欠席者が続出する。

この“異常事態”が収まったのは、南條池で優香ちゃんの亡骸が見付かってからおよそ1ヶ月が経過した後だった。

確か夏休み前の暑い日だったと思う。

優香ちゃん殺しの犯人として、近くに住む若い男が逮捕された。イタズラ目的だったのではないか？との事だった。

犯人が逮捕された事で、雨男の噂は急速に萎んでいった。

ちょうど夏休みを挟んだ事もあって、二学期に入ってから雨男という言葉を目にする事はほとんど無くなっていた。

あれほど大騒ぎになっていたのが嘘みたいに思える程、この噂話は皆の興味を失ってしまったのだ。

子供の戯言に辟易していたであろう親や教師達ホツとは胸を撫で下ろしていたに違いない。

この次の年の春、私は親の転勤により学校を去った。

親の転勤で引越してから10年後、私は地元の大学に進学していた。

アルバイトに明け暮れる毎日で、余り真面目に学業に打ち込んでいたとは言い難い。

まあ、留年はしたくなかったので試験の直前だけはきちんと勉強す

るようにしていた。

大学に入って二回目の夏休みに入る前、私は郷土民俗学という講座の試験の為に図書館通いをしていた。

試験内容は郷土の伝承や民話から、当時の時代背景や思想を考察し、論文を書いて提出せよというものだった。

私は連日図書館に通いながらネタになりそうな資料に目を通していったのだが、その中に気になるタイトルを見つけた。

《赤村の雨男》

思わず小学校時代の記憶がフラッシュバックした。

「まさか・・・」と思いながらも、焦る気持ちを抑えて読み進んだ。

赤村の雨男

昔、豊前の国の山中に赤村と青村という二つの村があった。

赤村と青村は互いに仲の悪い村だった。

ある時、日照りが続き赤村の井戸がすっかり干上がってしまった。

困った赤村の村人達は水をわけて貰うために青村の名主のもとを訪れた。

青村の名主はこう言った。

「赤村の村外れに伝兵衛という獵師がおるじゃろ。その娘を儂の息子の嫁にくれ。」

その言葉を聞いた村人達は、はてさてこれは困った事になったぞと

思った。

早くに女房に先立たれた伝兵衛は娘のお夏を目に入れても痛く無い位に溺愛している。

更には青村の名主の息子は“蛇”とあだ名され怖れられている男なのだ。

村人達は赤村の名主の家に伝兵衛を呼んで事の経緯を話した。

案の定、伝兵衛は強硬に反対した。

「お夏を蛇の嫁にやるわけにはいかねえ」

「儂等だってあなたの気持ちはようわかる。じゃがそうは言ってもこのままでは村の皆が死んでしまふ。何とかお願いできんか？」

「駄目なもんは駄目だ。」

「ではどうすれば良いんじゃ？」

「儂が青村に行って水を奪ってこよう。」

そう言つて伝兵衛はやおらに立ち上がり出て行こうとした。

村人達は慌てて伝兵衛を差し止め、縄で柱にくくりつけた。

村人達はそのまま伝兵衛の家に行き、お夏を連れて青村の名主のもとへ行った。

水をわけて貰つたおかげで赤村は何とか生き延びた。

伝兵衛がお夏が死んだ事を知つたのはそれから五年後の事だった。

「お夏は“蛇”に散々にこき使われ苛め殺されたらしい。」

失意に沈んだ伝兵衛は青村にある淵に身を投げて死んだ。

伝兵衛の魂は雨男となり、三日三晩大雨を降らせ、遂には二つの村は水の底に沈んでしまった。

.....
私はふうと小さく溜め息をついた。

当たり前の話だが、私が昔聞いた“怪談”とは全く違う。

そりゃそうか。

しかし何とも救いのない話だ。しかも最後の方が荒唐無稽すぎて、流れに妙に違和感がある。

何だか急に疲れてきたので、本を閉じて図書館の外にでた。

抜けるような青空から照り付ける日射しが目に痛かった。

その夜、私は不思議な夢を見た。

それは昼間に読んだ

「赤村の雨男」の夢だった。

.....
水を分けて貰う為に青村の名主の息子のもとにお夏が嫁いでから5年の歳月が流れていた。

当初は父のもとを離れ、違う土地で生活する事に不安もあったが、名主の息子はそんなお夏を気遣い、良く支えてくれた。

何故この優しい男が“蛇”などと蔑まされていたのか分からない。

とかく人の噂はあてにならない物だとお夏は思った。

夫婦の間には八重と松吉という二人の子ども産まれ、幸せな生活を送っていた。

青村から分けて貰った水で何とか苦境を乗り越えた赤村も、ここ数年はまとまった雨が降って水不足は幾分ましになっていたし、お夏が青村の名主の息子に嫁いだ事で、青村との関係も以前よりは良くなっていた。

赤村の村人達は伝兵衛に感謝し、礼をいって沢山の酒やご馳走を与えてくれた。

何もかも順調そうに見えた。

しかし伝兵衛だけはそうではなかった。

自分の本意では無い形で嫁に行ったお夏が幸せにしているのを聞くのは内心面白く無かったし、幾ら酒や食料を貰っても村人達を許す気にはなれなかった。

その年の春に伝兵衛は猫で足に怪我を負った。

それ以来外に出るのが億劫になり、昼間から家で酒ばかり飲むようになった。

最初の頃は心配した村人達が家を訪れて話相手になったり、食べ物を持ってきてくれたりしていたが、愚痴ばかり言う伝兵衛に嫌気がさしてそのうち皆足が遠退いていった。

寂しさを募らせた伝兵衛は己の不幸を嘆いた。

嘆きは呪いに変わり、いつの日からかこの世の全てを憎むようになっていた。

夏が終わり夜が長くなり始めた頃、右手に鉞を持って伝兵衛は家を出た。

伝兵衛がお夏の住む青村の名主の息子の家の前に着いたのは、次の日の夜更けだった。

ドンドンと戸を叩く音に気付いて名主の息子が家の外に出てきた。

見ると伝兵衛が顔に笑みを浮かべて立っている。

思わず息子も微笑み返して小さく頭を下げた。

その時に伝兵衛の右手に鉞が握られている事に気が付いた。

何か言おうとして頭を上げようとした刹那、伝兵衛の右手から鉞が振り落とされた。

鈍い音がし、鮮血が飛び散らせながら名主の息子はゆっくりと後ろ向きに倒れた。

ただならぬ気配を感じお夏と二人の子供が飛び出してきた。

眼前の思いもよらぬ光景を見て、お夏は声にならない叫びを上げてその場に座り込んでしまった。余りにびっくりして腰が抜けたのだ。

二人の子供は動けぬ母の傍らで泣き叫んでいる。

伝兵衛はずんずんと近付きお夏の側まで来た。

そしてくるりとお夏に背を向けると泣き叫ぶ松吉の脳天目掛けて、再び鉈を振り下ろした。

小さな悲鳴の後、松吉の泣き声が止んだ。

可哀想に松吉の小さな体は伝兵衛の力任せの一撃により原型を留めていない。

伝兵衛は、続いて一層大きな声で泣き叫ぶ八重に狙いを定めようとした。

その時、鉈を持った伝兵衛の背中に半狂乱となったお夏が飛びかかり大声で叫んだ。

「八重っ！早く逃げて！！」

弾かれたように八重が家の外に逃げ出す。

「待てっ！」

お夏を振り払い追いかけてよとした伝兵衛に再びお夏が後ろから抱きついた。

「何で・・・何で・・・」

お夏には今の状況が全く理解出来なかった。

涙と鼻水でまとも息が出来ない。

顔と襟には松吉の血がびっしりとこびりついている。

今のお夏にはかつて自分を愛してくれた父への思い等何処にもない。

ただただ伝兵衛が殺してやりたい程、憎かった。

揉み合う内に伝兵衛の右手の鉈がお夏の腕を傷つけた。痛みで一瞬力が鈍った腕をはねのけ、足にも鉈の斬撃を見舞った後、伝兵衛はお夏の方へ向き直った。

伝兵衛を見上げるお夏の瞳には憎悪の炎が燃え盛っている。

顔に笑みを浮かべたまま、伝兵衛は何ら躊躇する事なく鉈を数度振り下ろした。

家の裏山に逃げ込んだ八重は岩陰で震えていた。

恐ろしい。

早く朝になって欲しい。

亡くなった父や弟、それに身を挺して自分を逃がしてくれた母の事を思うと涙が出る。

それでもあの殺人鬼にばれない為に声を出してはいけない。八重は幼いながらに必死で泣きたいのを我慢していた。もの凄く長い時間がたったように感じたが、

ようやく東の空が白ずんで来た。

遠くの方から鼻歌が聞こえてきた。

「伝兵衛の声だ！」

逃げようと思ったが、どうやら違う方角に向かっているようだ。

よく聞くと鼻歌に混じってズルズルと何か引き摺るような音がする。

八重は恐る恐る岩陰から顔を出して覗いてみた。

「あっ！」

思わず声が出そうになり慌てて口をふさいだ。

伝兵衛が引き摺っていたのはお夏だった。

無造作に肩に足を載せて引き摺りながら歩いている。足を怪我している人間とは到底思えない力強い足取りだ。

お夏の体から滴り落ちる血の跡が夜明けの光と相まって紫色の糸の様に見える。

幸い伝兵衛は八重には気付かずそのまま淵の方に向かって行った。

八重はかなり間を空けて伝兵衛の後ろをつけた。

急に降りだした雨のおかげで、足音で気付かれる可能性は少ない。

10分程歩いた後、淵の手前に着いた。

伝兵衛は自分とお夏の死体を縄で結び付けている。

そして何かお夏に一所懸命話しかけているみたいだが、今度は雨音が邪魔になり良く聞こえない。

八重は死角に隠れながら近寄って行った。

「……八重を取り逃がしたのだけが、心残りじゃ。」

伝兵衛がそう呟くのが聞こえ、八重は心底ゾツとした。

「伝兵衛なぞ早くこの世から消えてしまえば良いのに！」

八重の心の声を聞いた訳ではあるまいが、伝兵衛はお夏と共に淵に飛び込んだ。 - - - - -

私は伝兵衛がお夏の死体と共に淵に飛び込み、水音が聞こえた所で目を覚ました。

気が付くと私は涙を流していた。

誰の為に流した涙かは分からない。

突然の悲劇に巻き込まれた八重を慮つての涙なのか、父の理不尽な仕打ちに対するお夏の悔し涙かもしれない。

或いは……。

私は夢の中では八重やお夏であり、時には伝兵衛でもあった。

惨劇を起こした伝兵衛の心中は確かに狂気はあったが、憎悪ではなく何か使命感の様な物で満たされていた。

自らを不幸だと嘆いていた伝兵衛は、自分の血筋をこの世から消す事が使命だと思つたのかもしれない。

何にせよ夢の話だ。

色々考えても想像の域を出ないであろうし、別に特に意味なんて無いのかもしれない。

一つだけはつきりと覚えているのは、一人難を逃れた八重の顔があの優香ちゃんにそっくりだったという事だ。

翌日、流石に気になってまた図書館に行ったのだが、赤村の雨男の物語が載っていた本は何故だか見付ける事が出来なかった。

友人達にも聞いてみたが、赤村の雨男の話を知っている者は誰一人として居なかった。

結局、その後赤村の雨男の話は目にする事も耳にする事も無く、記憶の片隅に追いやってしまっていた。

この話を思い出したのはつい最近の事だ。
今更ながらに夢を見たからだ。

淵に飛び込んだ伝兵衛だったが、実は死にきれず浮かび上がった。
飛び込んだ衝撃で縄が弛んでほどけたのだ。

ずぶ濡れで雨に打たれながら歩いていく。
身に纏っている空気はもはやこの世の者のそれではなかった。

そのまま伝兵衛は霧の中へ消えて行った。

そう言えば今思うと夢の中で見た伝兵衛の顔は、年齢こそ違つがど

ことなく優香ちゃんを殺害した犯人、あの若い男の面影があった。

あの犯人は普段は真面目で、とてもそんな恐ろしい事をするような人物には見えなかったらしい。

まさか伝兵衛の呪いが時を越えて成就したのだろうか？

そう考えるとあの【雨男】の噂は、八重の子孫が伝兵衛に狙われている事を報せる為の“警報”だったのかもしれない。

いや或いは八重の子孫を殺せという伝兵衛からのシグナルであったのかも。

まあ、この話は全て私の馬鹿馬鹿しい妄想なのだ。

実際は赤村や伝兵衛、八重が存在した事実はない。

ただか夢の話之余り深く考えない方が良さだろう。

部屋の鏡に写った顔にもどことなく伝兵衛の面影があった。

気のせいであろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258d/>

雨男

2011年10月4日22時25分発行